

2015年10月29日

<報道関係各位>

一般社団法人 日本化学工業協会

国際ルールを用いた化学品混合物のリスク評価手法を開発 10月30日(金)より、「JIPS混合物リスク評価のためのガイダンス」を公開

一般社団法人日本化学工業協会(住所:東京都中央区、会長:小林 喜光(株)三菱ケミカルホールディングス会長)、以下「日化協」はこのほど、化学品混合物のリスク評価に関し、国際的に普及している基準を活用したリスク評価手法を開発しました。10月30日(金)より日化協が提供しているリスク評価支援サイト“JCIA BIGDr”(http://www.jcia-bigdr.jp)を通じて、まずは会員向けに評価手法のガイダンスを公開し、業界内での普及を図ります。

また、11月20日(金)から名古屋大学で開かれる第28回日本リスク研究学会年次大会において、本リスク評価手法の概要を発表します。

化学物質のリスク評価については、世界各国・各地域の化学工業協会が加盟する国際化学工業協会協議会が中心となり、個々の化学物質のリスク評価および情報公開、サプライチェーンを通じた共有を目的とした自主活動を、GPS^{※1}活動として進めています。具体的には、化学品を提供する企業が、その化学品のリスク評価を実施し、安全性情報を記載した“安全性要約書”を作成・公開・共有するといった取り組みを進めています。日本では、日化協が GPS の日本版である“JIPS^{※2}”を2009年より開始しました。しかしながら、化学製品の大部分を占める混合物については、統一された形での国際的に確立した評価手法がこれまでなく、欧州で検討されている手法は欧州の事業者向けであり、手間やコストの面で日本の事業者が利用するのが難しく、国内の化学業界からリスク評価手法の開発が求められていました。

※1 GPS: Global Product Strategy、※2 JIPS: Japan Initiative of Product Stewardship

そこで日化協は、世界各国で既に導入されている、国連が定めた化学品の分類や表示についてのルール、GHS(Globally Harmonized System of Classification and Labelling of Chemicals)で区分された危険有害性の基準をもとにリスク評価を行うGHS法(GHS-based approach)をこのほど開発しました。本手法では、リスク評価を行いたい混合物において、その中で評価すべき成分物質(リード物質という)をGHS分類の区分を基準に選定し、選定されたリード物質それぞれのリスク比を加算することでリスク判定を行います。国際的に普及しているGHSを用いるため、日本の事業者にとってもリード物質の選定基準がわかりやすく、かつ、日本以外の事業者でも実用的に利用しやすいのが特徴です。

日化協ではまずは会員向けに、本手法を用いた混合物のリスク評価手法を紹介した『JIPS 混合物リスク評価のためのガイダンス』を10月30日(金)より、“JCIA BIGDr”で公開するとともに、セミナーや説明会の開催等を通じて会員への理解促進を進めていきます。また今後は、日本国内のみならず、特にアジアでの普及を目指した啓発活動を実施していく予定です。

『JIPS 混合物リスク評価のためのガイダンス』

第1章. 概要

第2章. リード物質選定方法の概要

- ・日化協が開発した方法(GHS法)の概要および欧州の動向紹介

第3章. GHS法

- ・GHS法を用いた混合物評価の全体像およびリード物質選定方法

第4章. GHS法を用いた混合物評価例

- ・有害性情報調査、ハザード判定、ばく露評価およびリスク判定

附属資料



<<本件に関する報道関係者からのお問い合わせ先>>

一般社団法人日本化学工業協会 広報部 松本・鎌田 TEL:03-3297-2555